

関東に堀越公方が参入

政知が関東に下向して...

各勢力が膠着状態となった関東

に向けて、長祿二年(1320)、將軍

義政は古河公房・成氏への對抗策

として、異母兄の政知(僧職に在っ

たが、選俗させて)を鎌倉公方に任

じて東下させた。政知には山内上

杉家ほか配下として付けられ、

実権は全て幕府が握っていた。そ

こで関東に在任する武士の協力が

得られず、鎌倉には入れなかった。

止む無く手前の伊豆の堀越に入っ

て「堀越公方」となる。同年、

義政は関東への派兵を見送る

將軍と重臣に推されて武衛家当

主となった斯波義敏は、越前・尾

張・遠江の三ヶ国守護を継承して、

享徳の乱の鎮圧のために関東に派

兵することを命ぜられた。しかし、

越前守護代との争い(長祿合戦)を

引き起こしたため、義政の忌避に

触れ、斯波氏の当主は交代して、

関東への派遣は中止された。

関東の争いに幕府も加わって

関東管領山内上杉・扇谷上杉両

家に幕府と堀越公方が加わって、

下野・常陸・下総・上総・安房国

を勢力範囲とする古河公方と、そ

れら諸国の豪族に対抗したので、

関東を二分する争いは続いた。

五十子で両陣営は争う

長祿三年(1321)、関東管領上杉

房顕は、五十子に城砦を築いて持

朝・房定(山内上杉)・教房(天懸上杉)

とその子、政藤ら一族を結集させ

た。これを知った足利成氏は五十

子に出撃して、十月、両軍は近く

の太田庄(現・埼玉県熊谷市)で交

戦した。上野の岩松家純・持国が

で攻撃をかけたが敗北した。しか

し、古河軍も撤退したため五十子

は上杉軍の手に確保され、以後房

顕はここを拠点として長期戦の構

えを見せ始める。

持朝は堀越公方の敵方となる

一方、持朝は寛正元年(1320)、

兵糧料所(兵糧米を徴収するため

に指定された所領)の設置を巡って、

寛正三年九月、京都で徳政令を

求める土一揆が発生し、浪人や在

京大名の内者(家人)も加わって、

財物を奪ったり火を放つなどの行

為に及んだ。

京都で再発した一揆は京都七口

(京都につながる街道の代表的な出入口

閘所)を封鎖したので、幕府は諸

大名に鎮圧を命じ、処刑も含めた

過酷な取締りが行われる。

義政は政治に倦んで隠遁を望む

各地で発生する一揆や政治的な

混乱に倦んだ義政は、將軍職を引

退して隠遁生活を送ることを夢見

るようになり、

義政は二十九才になっても、富

子の側室との間に後継男子が無

かつたので、將軍の職を実弟の義

尋(浄土寺門跡)に譲ることを思い

立った。義尋は、まだ若い義政に

後継男子が誕生する可能性がある

と考え、就任の要請を固辞した。

しかし、義政が再三説得したため、

寛正五年十一月(1325)、義尋は意

を決して還俗する。義視と名を改

め、細川勝元の後見を得て今出川

邸に移った。

義政・富子の実子を將軍に

後継者を実弟と決めた翌年の寛

正六年十一月(1326)、義政と富子

との間に義尚(のちに義熙と改名)

が誕生する。実子が將軍職に擁立

鎌倉公方と関東管領の対立

「永享の乱」は...

永享十年(1328)、足利氏の血筋

を引く鎌倉公方の足利持氏は、関

東管領の職を独占してきた上杉家

の憲実と、管領の補任権を握って

いた幕府に対抗したので、これに

介入した六代將軍義教は持氏の討

伐を命じて戦が始まった。

「鎌倉府」の成り立ちは...

遡って、尊氏の弟の直義が鎌倉

に在ったところ、室町幕府は関東を

統治するために「鎌倉府」を設置

した。その首長を関東管領、補佐

役を関東執事として任命したが、

後に、直義を祖とする関東管領は、

將軍家に擬えて「鎌倉公方」と称

し、また関東執事の上杉氏は、こ

れに倣って自らを「関東管領」と

僭称するようになる。

直義の子孫の「鎌倉公方」方と、

「関東管領」を独占して来た上杉

家は、任命に関わる將軍を介して

對抗するようになり、本来の相補

の体制は崩壊した。山内上杉家は関

東管領を独占してきたが、扇谷上

杉家も力を得、さらに両家の家宰

を務める長尾氏、太田氏は互いに

縁戚にもなつて活動した。

扇谷上杉家の由来は...

足利尊氏の母方の叔父にあたる

上杉重頼を祖とする家系で、初代

の上杉顯定(正平六年/觀應二年/

1351に生まれる)は、丹波守護だっ

た義父・朝定の許を離れて、貞治

年間頃(1300年代)、関東に下向し

た。鎌倉公方の足利氏満に任せ、

鎌倉扇谷の地に居住したので、扇

谷上杉家と呼ばれる。

顯定は天授六年/康暦二年

して山内上杉家が関東管領を独占

したため、勢力を持つ家柄にはな

れなかった。

應永二十三年(1426)の上杉禪

秀の乱で氏定は、当初劣勢だった

持氏方に合力するため出陣した

王丸(永寿丸、または万寿丸)は、

男として生まれる。母方の伯父の

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

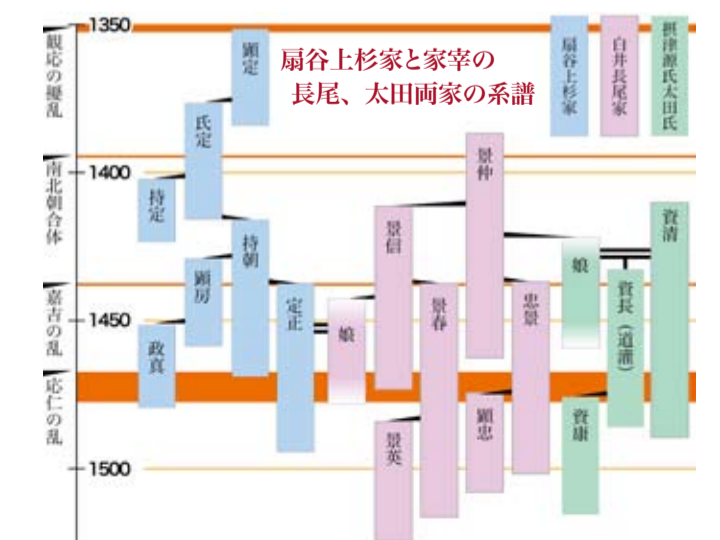
出来なかった。

長尾氏・太田氏と山内家との絆

が暗殺されるという争乱(嘉吉の乱)

山内上杉家宰の長尾景仲は、

出来なかった。



ので、西軍はこの邸宅に向けて攻撃を開始した。斯波義廉が家臣を連れて勝久郎に向かい、対する東軍は勝久の救援に動いて一条通りを西進、斯波軍に攻めかかったが反撃に遭う。東軍は一条通りから南に下がった正親町通りを進み、迂回して斯波軍と交戦した。戦闘は早朝から翌日の夕刻まで行われたが、両軍共に疲弊して戦線は膠着する。ついで將軍義政の停戦命令が出されて戦闘は停止する。東軍は花の御所を押さえたため優位に立ち、義政は六月に勝元に対して將軍家の旗を与え、官軍と認めた。

応仁の乱は拡大して

状況を打開するため山名宗全は、周防・長門守護大内政弘に出陣を要請した。これに応じた大内軍は東進して京都に向かい、戦いは本格化する。

西軍が優勢になると

六月ころから西軍の援軍が到着し始め、八月には周防の大内政弘が、伊予の河野通春ら七か国の軍勢一万と二千艘の水軍を率いて入京したので西軍は勢力を回復する。天皇・上皇は室町亭に避難したが、東軍の総大将だった義規が出奔して伊勢に逃亡する。

大内政弘は船岡山に陣取り、九月、三宝山(現・伏見区に在り)に火を放つ。郊外の南禅寺裏の山(現・左京区)でも戦いが勃発(東岩倉の戦い)し、十月の相国寺の戦いでは激戦となって両軍に多くの死傷者を出したが、勝敗を決するには至らなかった。しかし、焼滅した相国寺跡に西軍の斯波義廉が陣取り、畠山義就は山名宗全邸の西に移って、東軍は劣勢に立たされた。戦いは市中から洛外に

烏丸で大内政弘は東軍の毛利豊元(安芸国・毛利氏)・小早川隆平(安芸国を拠点とする沼田小早川氏)と交戦し、五月には東軍の細川成之(阿波・三河・讃岐守護、阿波細川家)が斯波義廉邸を攻める。また細川勝元が山名宗全の陣を攻撃する。八月には勝元の兵が相国寺跡の畠山義就の陣を攻めたが、戦闘は次第に洛外に移り、両軍は山科、鳥羽、嵯峨で交戦した。



応仁の乱 「紙本著色真如堂縁起」下巻より(部分) 真正極楽寺(京都)蔵 作者:掃部助久国 大永4年(1524)

法親王(後柏原天皇の皇子、三条西実隆)後柏原天皇の縁戚関係の公家らの筆で、詞書の起草者から筆者までの制作事情がすべて明らかな稀有な絵巻物である。

義尚を擁立するか・・・

九月となり、しばらく伊勢に滞在していた義規が勝元や義政に説得されて東軍に帰陣した。將軍・義政は閏十月、文正の政変で義規と対立した伊勢貞親を政務に復帰させ、義尚の擁立に動き出した。

義規を新將軍として・・・

一方、細川勝元は義規の擁立には動かず、出家を勧めた。そのため義規は再度出奔して比叡山に登る。西軍は比叡山に使いを出して義規を迎え入れ、新將軍として奉り、正親町三条公朝、葉室教忠らも西幕府に祇候(奉仕して御機嫌を伺う)し、幕府の体裁を整えた。以降、西軍では義規が発給する御内書によって命令が行われ、独自に官位の授与も行うようになる。

大内氏の活動は・・・

大内政弘の圧倒的な軍事力によつて山城(現・京都南部)は、次第に西軍によつて制圧されたので、京都市内での戦闘は散発的なものとなり、戦場は摂津・丹波・山城(京都に近い「畿内」)に移ってゆく。そのため東軍は反大内氏の活動を活性化させる。

文明元年(1469)には、大内氏の重臣が離反して内領に侵攻する。また文明二年にも反乱が起こったが、何れも留守居のものに撃退されたため、政弘は軍を引くことなく、山城の大半は西軍の制圧下に在った。

厭戦気分が漂う・・・

それ以降、東西両軍の戦いは膠着状態に陥った。長引く戦いと盗賊の跋扈によつて何度も放火された京都の市街地は焼け野原と化し、さらに上洛していた ↓下段へ

[享徳の乱は終息する] →・・・[応仁の乱が終る] →・・・ ← [応仁の乱が始まる] →・・・ ← [享徳の乱が発生する]

| 西暦 | 元号 | 主な出来事 |
|------|-------|--|
| 1484 | 文明16年 | 一月、享徳の乱が勃発。足利成氏は古河公方となる。將軍足利義政と日野富子が結婚する。 |
| 1483 | 文明15年 | 將軍足利義政と日野富子が結婚する。 |
| 1482 | 文明14年 | 將軍足利義政と日野富子が結婚する。 |
| 1481 | 文明13年 | 將軍足利義政と日野富子が結婚する。 |
| 1480 | 文明12年 | 義政は長谷聖護院の山荘に移る。 |
| 1479 | 文明11年 | 足利義尚権大納言に転任。徳政一揆が問所を破壊する。 |
| 1478 | 文明10年 | 義政は長谷聖護院の山荘に移る。 |
| 1477 | 文明9年 | 武蔵国五十子の戦い、応仁の乱が終息する。 |
| 1476 | 文明8年 | 文明十二年(1475)にかけ関東管領上杉氏の有力家臣長尾景春の反乱が始まる。 |
| 1475 | 文明7年 | 文明十二年(1475)にかけ関東管領上杉氏の有力家臣長尾景春の反乱が始まる。 |
| 1474 | 文明6年 | 義政は堀川の小河御所を建設して移る。 |
| 1473 | 文明5年 | 細川勝元、山名持豊が死去する。義尚に征夷大將軍宣下、九代將軍となる。 |
| 1472 | 文明4年 | 持朝の三男の定正が扇谷上杉家の家督を継ぐ。太田道灌が江戸城内で歌合の会を催す(江戸歌合)。 |
| 1471 | 文明3年 | 義政は堀川の小河御所を建設して移る。 |
| 1470 | 文明2年 | 上杉氏は足利成氏の居城の古河を攻める。大石顕重はこれに参戦し、足利義政から感状を受ける。 |
| 1469 | 文明元年 | 応仁の乱、東西両軍の戦いは膠着する。太田道灌が河越城内で連歌の会を催す(河越千句)。 |
| 1468 | 応仁2年 | 応仁の乱は拡大して洛外に |
| 1467 | 応仁元年 | 扇谷上杉家持朝が死去する。 |
| 1466 | 文正元年 | 義政の側近伊勢貞親が追放される(文正の政変)。 |
| 1465 | 寛正6年 | 義政、富子の実子(のちの將軍義尚)が誕生。 |
| 1464 | 寛正5年 | 義政は弟の義規を後継ぎに決める。 |
| 1463 | 寛正4年 | 全国的な飢饉で、京都では八万人が餓死する。寛正の土二揆。 |
| 1462 | 寛正3年 | 京都で多くの死者が発生するが將軍義政はこの間に花の御所を改築する。 |
| 1461 | 寛正2年 | 畠山政長は將軍から偏諱を受ける。 |
| 1460 | 長祿4年 | 畠山政長は將軍から偏諱を受ける。 |
| 1459 | 長祿3年 | 足利政知は下向して「堀越公方」に。武蔵国五十子の近傍で「太田庄の戦い」。この年から寛正2年にかけて「長祿・寛正の飢饉」。 |
| 1458 | 長祿2年 | 太田道真(道灌は河越城・江戸城を築城する)。 |
| 1457 | 長祿元年 | 足利政知は下向して「堀越公方」に。長祿合戦。越前守護斯波義隆と守護代(のちの)の戦い。 |
| 1456 | 康正2年 | 將軍足利義政と日野富子が結婚する。 |
| 1455 | 康正元年 | 將軍足利義政と日野富子が結婚する。 |

上段より↓ 守護大名の領国にまと呼ばれる。隠居した義政はここで戦乱が拡大したので、京都で戦いに専念できなくなる。か

有力武將を寝返らせる

文明三年(1469)五月、斯波義廉の重臣で西軍の主力だった朝倉孝景が將軍義政から越前守護職に補任され、東軍側に寝返った。幕府側は決定的に有利となる。

幕府の業務が再開して・・・

文明五年の三月には宗全が、また五月には勝元が相次いで死去する。十二月には義政が義尚に將軍職を譲って隠居した。す

日野富子が実権を把握する

義政の実権は失われていった。義政は文明三年(1469)ころから、細川勝元が所有する邸宅(現・上京区堀川)を利用したが、のちに「小川御所」または「小川殿」

「市民フォーラム」は、地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によつて市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

「市民フォーラム」の活動

「市民フォーラム」は、地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によつて市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

TEL 090 (3048) 5502

編集部原宛にどうぞ